一紅会　歴史研究会　　（２０１２・１０・２１）

「山梨中央銀行と初代蔵相松方正義」

～日本金融史の流れの中で～

渡辺　房男（日本文藝家協会会員）

（講演要旨）

○　明治維新と貨幣
　徳川幕政の貨幣制度から近代の貨幣制度への転換
　明治４年５月１０日の新貨条例と７月の廃藩置県
　　（維新の行政改革の総仕上げ）

○　第１次国立銀行条例　　明治５年１１月
　大隈重信を中心とする維新政府の銀行創設
　大蔵少輔伊藤博文の訪米体験による提言
　「金本位制」と銀行制度の必要性を政府は認識
　　幕政時代の両替商から西欧に範をとった銀行を！
　　しかし、金融政策の失敗・・・創業は全国で４行のみ
（兌換紙幣の発行を義務化したため、多くの人が紙幣をすぐに金貨に換えた）

○　第２次国立銀行条例　　明治９年８月
　大蔵卿　大隈重信　　大蔵大輔　松方正義
　松方はこれまで地租改正事務局におり、政府の大きな課題であった
　地租改正による税収の確保に従事していた。
　二人は、不換紙幣の発行を認可
　全国に次々と国立銀行が誕生した
　最終的には１５３行

　従来の国立銀行（東京第一、横浜第二、新潟第四、大阪第五）に
　加えて、
　東京第三（安田善次郎が頭取）、福島第六、高知第七、豊橋第八、
　熊本第九が次々と開業した

甲府には、明治１０年に山梨第十国立銀行が誕生。
全国的に見て早い創業

「頭取」の由来
・芝居小屋の楽屋責任者
・維新直後に創設された「為替会社」のトップを頭取と称した。

○　山梨の第十国立銀行、誕生の経過
第十国立銀行の前身
県令藤村紫朗の殖産興業策
栗原信近（穴山出身）と興益社（県内初の金融会社）
第十国立銀行開業（明治１０年４月１５日）
頭取　栗原信近　　役職員１９人
資本金１５万円　　大株主は若尾逸平

第十国立銀行紙幣の発行
（資本金の８割まで紙幣発行が可能）

○　西南戦争とインフレ
明治１０年２月、維新政府の危機
西郷隆盛が率いる鹿児島の私学校の決起
西南戦争の軍費調達による不換紙幣の増刷発行
インフレの猛威

○　松方財政の始動
西南戦争終結の翌年明治１１年２月、松方はパリ万国博覧会の責任者として、フランスに出張
支援者である大久保利通の横死（明治１１年５月）
フランスなど欧州の金融制度に学ぶ
紙幣の流通量を管理する中央銀行創設への思い
兌換銀行券によるインフレ抑制への決断
帰国後、大蔵省から内務省へ異動
欧州で学んだ中央銀行制度確立への提言は無視される

○　松方正義と日本銀行

明治１４年の政変で参議大蔵卿大隈重信の失脚

松方、大蔵卿に就任

兌換制への移行と紙幣整理への施策

中央銀行としての日本銀行創業設（明治１５年１０月）

国立銀行条例の改正（明治１６年６月）

国立銀行の普通銀行への転換を指示

（紙幣発行権を日本銀行に一元化）

○　全国に広がるデフレ不況

紙幣の流通量が大幅に減少

各地で農民の蜂起が続く

最大の蜂起は、明治１７年１０月の秩父困民党の蜂起

○　第十国立銀行の紙幣整理策

銀行紙幣を日本銀行に返却し、公債を受け取る

公債利子の低迷で苦しむ

○　松方大蔵卿による初の兌換日本銀行券発行

明治１８年（１８８５）５月　１０円券発行

以後、９月に１００円券と１円券、明治１９年１月に５円券発行

○　第十銀行への転換と開業

明治３０年（１８９７）１月１日

「国立」の名前が削除されて、第十銀行として開業

頭取　佐竹作太郎　役職員４９人　　資本金６２万５０００円

○　山梨中央銀行の誕生

昭和１６年（１９４１）１２月１日、有信銀行と合併

政府による軍事体制構築のための１県１行策

平成２３年（２０１１）

山梨中央銀行は創業７０周年を迎えた

（今も残るナンバー銀行）

第四銀行（新潟）　第十六銀行（岐阜）　第七十七銀行（宮城）

第八十二銀行（長野）　第百五銀行（三重）　第百十四銀行（香川）

（以上）

一紅会・第１３回「渡辺房男先生を囲む」歴史研究同好会　出席予定者名簿（敬称略）

「山梨中央銀行と初代蔵相 松方正義」

～明治日本の金融史を見つめながら～

催行日　平成２４年１０月２１日（日）午後１：３０～　（受付は１：００～）

会　場　ベルモントホテル　２Ｆ会議室　〒１１１－００５２　台東区柳橋１－２－８

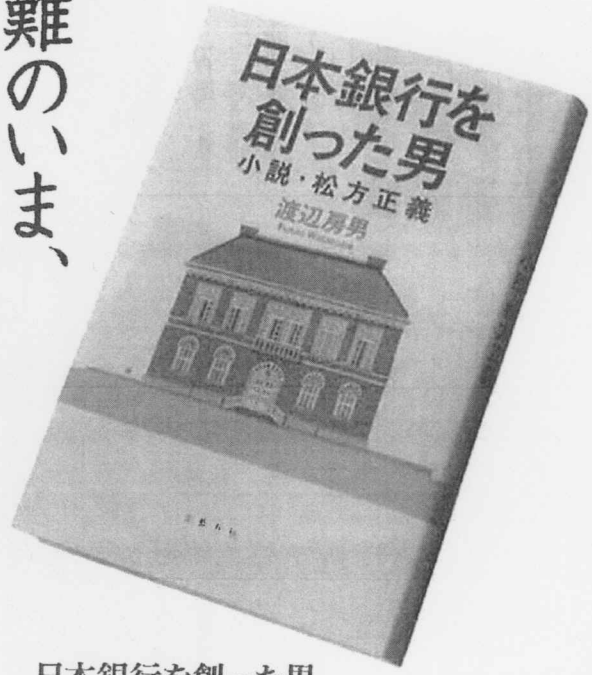
☎０３－３８６４－７７３３

会　費　１，０００円

NO	卒業年次	お名前
1	Ｓ２８年卒	渡辺　圭子
2	Ｓ３０年卒	荒谷　良雄
3		神田　四郎
4		神田　信子
5		新井　道子
6		石井　泉女
7		小坂　敏子
8		斉藤智恵子
9		瀧川さち代
10		神宮司房義
11		荒木　高子
12		遠藤　政子
13		呉藤勢津子
14		近藤　文子
15		塩瀬　昭子
16		田上百合子
17		轟　佐知子
18		井上　若子
19		折口有里子
20		清水　容子
21	Ｓ３２年卒	雨宮　武
22		田中　博久
23		小澤　綾子
24		佐野まさる
25		若尾　和子
26	Ｓ３３年卒	河内　一郎
27		五味　一彦
28		樋川　紘一
29	Ｓ３４年卒	斉藤　峰子
30	Ｓ３５年卒	作道　恒
31	Ｓ３６年卒	田村　久夫
32		塚越　洋
33		辻　武司

NO	卒業年次	お名前
34		雪江　武雄
35		谷口百合子
36	Ｓ３７年卒	黒田　順子
37		小松　寿恵
38	Ｓ３８年卒	雨宮　武士
39		一瀬　明
40		武内　紘司
41		長沼　真
42		祢津　信夫
43		山田　常夫
44		梅澤　梅子
45		新海　行子
46		鈴木　紀子
47	Ｓ３９年卒	斉藤美都子
48	Ｓ４０年卒	斉藤　勝人
49		佐野　允夫
50		原　護
51		藤巻　芳彦
52		宇野由美子
53		深沢　保子
54		山縣　萩江
55	Ｓ４１年卒	山本　秀彦
56	Ｓ４４年卒	杉本　恭子
57		峯川　文江
58	Ｓ４５年卒	佐々木まち子
59		新倉美智子
60	Ｓ４６年卒	山下　惠子
61	Ｓ４７年卒	佐藤みどり
62	Ｓ５０年卒	海老原綾子
63		斎木　裕子
64	Ｓ５２年卒	佐藤　守
65	Ｈ３年卒	保坂　香子
66		

財政困難のいま、お手本となる一冊。



日本銀行を創った男
小説・松方正義
渡辺房男／文藝春秋／1680円

山内昌之
明治大学特任教授・国際関係史

いま日本の政治家がいちばん学ぶべき先人は、松方正義ではないだろうか。

一般に松方といえば、デフレ政策と緊縮財政の元祖として知られるが、渡辺房男氏の新作ではもっと骨太の愛国者として財政健全化に努めた輪郭と歴史が描かれる。

まず、この本を読んで、明治の政治家も現代の国会議員たちと同じように財政に暗かったことに驚かされる。このあたりの事情が数字に裏付けられた財政学の分かりやすい説明を通して語られる点が本書の魅力である。

たとえば、明治十五年の歳出額は経常費と臨時費合わせて七三五〇万円であり、前年より二〇〇万円も増加していた。二年前には六一三〇万円であったので、予算規模の膨張は驚くべきであり、これこそ紙幣による購買力の低下をもたらしていたのだ。実質的な紙幣価値は、正貨の銀と同じではない。明治十五年には銀一〇〇〇円に対して、紙幣価値は一五七一円だったのである。ところが、国立銀行条例が改正された明治九年には、平均九八九円であり、むしろ紙幣の価値のほうが高かったのである。しかし、全国の国立銀行が不換紙幣をほぼ自由に出す一方だったので、銀に対する紙幣価値は下がる一方だった。西南戦争が生じた明治十年には一〇三三円となり、十五年には一五七一円になったのである。

いまもむかしも普通の政治家には、価値の下落した紙幣をもとに予算を編成しても、それは「実効のある金」にもとづく予算にはならないという理屈が呑み込めないらしい。明治十四年に例をとると経常歳入の六二八六万円は、現状の紙幣価値が正貨一〇〇円につき一七〇円なので、三七〇〇万円にすぎないことになる。つまり各省庁の予算実額が著しく目減りしているのだ。凡庸な政治家が理解できないのは、名目上多額の予算を各省に分配したとしても、実効性のある予算とはならない点にある。

では、これを解決するにはどうしたらよいのか。まず名目と実質の金額差である三〇〇〇万の正貨銀を三年間で備蓄しながら、各省の経費の節減を図ることが必要になる。松方は、この理屈を無視した政治家や官僚が平気で予算増を求めてくることに腹を立てた。その一方で抜本的な財政再建に乗り出したのである。

そのためには、まず物価騰貴を食い止める方策が必要になる。最善の策と考えられたのは日本銀行の創設にほかならない。日本で唯一の紙幣発行権をもつ銀行の役割は、無秩序に各地の国立銀行が発券した紙幣の回収と、冗費の節減をはかることで国家財政の健全化をはかる点にあった。本書は、西欧にも前例のないほど困難な財政金融政策に挑戦した使命感あふれる政治家の姿をリアルに描いている。国民から国会議員にいたるまで各層が読むにふさわしい本格派の小説である。●

中日新聞
2012年（平成24年）8月24日（金曜日）　12版　社会　30

第353回中日懇話会

渡辺房男氏（作家）が講演

第三百五十三回中日懇話会が二十三日、浜松市中区のグランドホテル浜松で開かれ、作家の渡辺房男氏が「日本財政を創った明治の男たち」をテーマに講演した。明治初期に活躍した大隈重信と松方正義の足跡を紹介しながら、通貨単位「円」の成り立ちや日本銀行が創設されるまで「黎明期」のエピソードを語った。

講演要旨

明治政府の通貨・財政制度をみる時、大隈重信という人物をたどるのが出発点になる。大隈の一番の功績は、通貨「円」を定めたことだ。

幕末、日本には小判やメキシコドルといったさまざまな貨幣が使われていた。国民が日常使う通貨がばらばらではいけないと、新政府は新貨幣に統一することを決めた。その責任者となった大隈は一八六九（明治二）年に「円、銭、厘」の呼称を決めて七一年に一円を一ドルとする新貨条例を布告した。日本通貨の骨格を決めて外国に通知した。これは国家として経済的にも立派に独立したことになる。

円と日銀 黎明期の困難

あと紙幣の問題が残った。当時、各藩の藩札や新政府が発行した「太政官札」を新紙幣に統一しようと考えて、金や銀に交換できない不換紙幣「明治通宝札」を発行した。偽札を防ぐために、ドイツで刷ったため、「ゲルマン紙幣」と呼ばれた。国内では当時できなかった細かい印刷が人気にもなった。金や銀の裏付けはなかったが市中には、かなり出回った。

ここまでは良かったが、予想もつかない事態が起きた。それは、薩摩に下野した西郷隆盛らによる「西南の戦争」だ。誕生したばかりの明治政府は軍事費調達のために、「明治通宝札」を増刷した。コメの価格が三年で二倍になるような、すごいインフレが起きてしまった。

インフレの最中の七八年にパリで開かれた万国博覧会の責任者としてフランスに行ったのが松方正義だった。彼は、パリで欧州の中央銀行制度を学んだ。それは、政府が紙幣を印刷するのは危険で、中央銀行が流通量などを見定めた上で適正な発行高を決めるということだった。帰国後、八一年の政変で野に下った大隈に代わって大蔵卿（現在の財務相）に就任した。

翌八二年に日本銀行が開業されたが、紙幣の管理が簡単には行かなかった。市中にあふれた不換紙幣を整理して、金や銀の裏打ちがある兌換（だかん）紙幣に替える必要があった。こうした中、旧紙幣の通貨量は急激に減ったため、「松方デフレ」が起きた。八五年になって、やっとデフレを克服した。そして、初の兌換紙幣となる「日本銀行十円券（大黒十円）」を発行することができた。

日本の通貨制度・財政の土台を創った大隈、松方の二人の男を追って見ると、明治維新からわずか十八年の間に、日本がどれだけの経済的な困難に直面して、それを克服したかが分かる。

◇

次回は九月十九日、ホテルコンコルド浜松で。講師は、未来工業創業者の山田昭男氏を予定しています。

わたなべ・ふさお　1944年甲府市生まれ。東京大文学部仏文科卒。NHK在職中の99年、「桜田門外十万坪」で第23回歴史文学賞を、2001年に「ゲルマン紙幣一億円」で第15回中村星湖文学賞を受賞。主な著書に「円を創った男　小説・大隈重信」「日本銀行を創った男　小説・松方正義」など。日本文芸家協会会員。